

新井山洋子氏 講演

セーフコミュニティとボランティアの協働

2024 年度定例会議において、十和田市のセーフコミュニティの立ち上げから現在まで主要メンバーとしてかかわり続けておられる新井山洋子氏に市職員及び市民団体の両方の立場からお話をお伺いしました。

1. 自己紹介

皆さん、こんにちは。ただいま紹介いただきました、青森県十和田市の「セーフコミュニティとわだをみんなですすめ隊(以降、「すすめ隊」)」顧問の新井山洋子です。(日本セーフコミュニティ推進機構の代表である)白石さんも「ようこ」で、私と名前が同じですが、白石さんは太陽の「陽」、私は、太平洋の「洋」です。



私は、1949 年、青森県三沢市に生まれました。海のそば、太平洋の沿岸なので、親がそれにちなんで「洋」子にしたのだと推測しています。つい先ほど、後期高齢者になったばかりです。1978 年(昭和 48 年)に青森県十和田市に保健師として採用され、2005 年に市の健康推進課長、2008 年(平成 19 年)に健康福祉部長、退職後の 2010 年から 2 年間、市のセーフコミュニティ推進室次長を務めました。その後 2012 年から 2 年間は、ボランティアとして十和田市セーフコミュニティコーディネーターとして関わり、現在に至っています。

2. 市職員としてのセーフコミュニティとの関わり

まず、市職員としてのセーフコミュニティの関わりについてお話します。2004 年から 2012 年(3 月)の間です。

まず、2004 年(平成 16 年)7 月にセーフティプロモーションの講演会がありました。これは、上十三保健所(県型)主催の地域研修という形で開催されました。当時はまだ「セーフティプロモーション」という考え方はなくて、どちらかといえば「ヘルスプロモーション」でした。だから、事

故とかというのもどちらかというヘルスプロモーションの視点から活動していました。ですので、「セーフティプロモーション」という言葉は、この時初めて耳にしました。

2005 年の 8 月、当時の保健所長が非常に熱心な方で、「セーフティプロモーションという考え方を取り入れてはどうか」、「十和田市が安全安心なまちづくりを当時から推奨していたので役に立つのではないかと前市長に説明されました。その時に私も同席していきまして、市長から「十和田市は経済状況が非常に厳しく、すぐに新しい施策を取り入れるということは難しい。行政で取り上げる意義や成果について勉強会をして、よいものであれば提案してくれないか」と話がありました。

そこで、2005 年 10 月に自主勉強会を開始しました。保健セクターが主導し、月 1 回から 2 回、市や県の保健師、事務職の方々と一緒に勉強会をしました。この「セーフティプロモーション」という考え方が国内に入ってきたのが 2000 年ごろのことで、当時私たちにとっては初めてのことでした。

このセーフティプロモーションの考え方は、白石さんなどスウェーデンのカロリンスカ研究所で勉強された先生方が日本にもち帰ってから普及されたようですが、当時は先生方も手探りの部分があったようです。今となっては笑い話ですが、何回勉強会を重ねても実体がつかみにくかったのです。「安全・安心」という総論はもろ手を挙げて大賛成です。でも、「では、具体的に何をやるの」となると実体が全く分らなかったのです。この時は、県の保健所長や青森県立保健大学の先生等もおられたのですが、全く実体がつかめないという状況が何か月も続きました。

3. 十和田のモデルは台湾セーフコミュニティ

十和田市のモデルは、台湾セーフコミュニティです。十和田市のセーフコミュニティはボトムアップ型と広く言われていますが、2006 (平成 18) 年に日本警察政策学会研究事業で台湾のセーフコミュニティの視察研修に声をかけていただいたことがきっかけです。日本市民安全学会の会長が中心となって、私と保健所長の 3 人で台湾の視察研修に行きました。これが一番の学びになりました。台湾は「人力無限」ということで、「人の力は無限なんだよ、その力を活かすということがとても大事だよ」ということで、10 歳台から 80 歳過ぎの方まで幅広い年齢層のボランティアの方がいました。私たちが行く先々に 20 人から 30 人くらいのボランティアの人たちが集い、「一緒に学ぶ」という姿勢をひしひしと感じました。警察が主体となり、消防、病院、警備会社、商業施設、行政、いろんな部門が横断的に協働して取り組んでいたんですね。手探りながらも、台湾型がいいなと思いました。といいますのも、十和田市はかねてから「一(いち)市民、一(いち)ボランティア」を進めていて、ボランティアの組織団体が非常に多いのです。これを活かせば、セーフコミュニティを進めることができるな、と確信しました。2 泊 3 日の研修会

は、会長が「観光のない海外研修は初めてだ」というくらい、朝早くから夜遅くまでセーフコミュニティについて学びました。都会型の台北市内湖地区、東勢(ドンシー)という農村型コミュニティの2か所を視察させていただきました。

私が特に素晴らしいと思ったのは、(地元での)勉強会では見えてこなかった実践・実体が、台湾に来たことで見えてきたことです。例えば、自転車ヘルメットの「専門店」でみたヘルメットは、日本でみるような真っ白ではなく、子供たちによるカラフルなデザインでした。また、スーパーマーケットに行くと、「このお店には、現在〇人の集客があります。これを超えると安全上の問題があるので入店できません。」と表示されているのです。また、台湾は地震も多いので、お店の前も後ろも脇も避難路の確保が非常に念入りにされておりました。また、飲酒運転が非常に多いということで、飲食業のお店にもいきましたが、全ての献立の上下に「飲んだら乗るな」という表示が書いてあります。アルコールを飲んだ方には必ず代行を呼んで、家まで送り届ける。飲んだ人には必ず名簿を記載してもらい、(代行業者には)送った後には必ず店に電話で「何時何分に送り届けました」と報告してもらう。途中で降りる人でも必ず送り届けるという仕組みをその頃から取っていたのです。そのほかにも、警備会社が開発したそうですが、高齢者がお風呂に入ったときに、少し動きが止まればブザーが鳴るというしくみも当時からありました。また、先ほど警察が主導しているといいましたが、繁華街や犯罪の多い箇所には移動警察派出所(ライトバンタイプのパトカー)がありました。

データ収集に関しては、病院では、どのようなケガで受診したのか、例えば、虫に刺されたとか転倒したとか、それをシート別・色別に分けて、受診者に書いてもらってそれを集計していました。私たちが「これは大変じゃないですか？」と聞いたところ、職員は「とても大変な作業です」と言っていました、「でも、これをやらないとセーフコミュニティは意味がない」とおっしゃっていて、地域が一体となって進めていることがわかりました。当時から医師、看護師などを入れたチーム編成による虐待予防を行っている様子を見て、私も「ああ、セーフコミュニティというのはこのようなことなんだな」と初めてわかってきました。そして、十和田はボランティアの層がとても厚いので、「十和田にも持ち込めるな」と感じたのです。なので、帰りには、「三年以内に十和田をセーフコミュニティにします」と宣言してしまいました。

4. セーフコミュニティとわだを実現させる会発足の経緯

続いて、「セーフコミュニティとわだを実現させる会」の発足の経緯をご紹介します。今日は、ボランティアの話を中心にお話します。2006年～2007年に子どもの外傷予防総合推進事業があり、青森県も十和田市も子どもの外傷に取り組んでいました。このときに、十和田市も手上げをして、県内三か所のモデルの一つとなりました。十和田市内を4地域に分けて、学校、教育委員会、警察、病院、地域の介護施設、スーパー、自転車業界などを巻き込んで体制を整

えました。いろんなディスカッションを経て、集大成として2007(平成19)年1月に市民フォーラムを開催しました。この市民フォーラムは、子どもの事故を減らすため「安全安心のまちづくりセーフコミュニティを目指して」という表題で、青森県主催、十和田市共催、前十和田市長¹にも出ていただきました。当時の市長に「セーフコミュニティの実現ということで、何とか一言入れてください」とお願いしたのですが、当初は二の足を踏んでいました。ですが、この日は突然の大雪で、駐車場も使えずどうしようかと思うような状態にもかかわらず200人ほどの市民が集まったのです。その熱気に押され、市長は「セーフコミュニティをやります」と宣言されました。また、県の部長クラスの方からも「十和田市をセーフコミュニティになるためにサポートいたしますので、皆さんよろしくお願いします。県としても力を尽くします」という言葉を頂きました。終了後に、約40人余りの勉強会を経てきた会員で「セーフコミュニティを実現させる会」の発足を宣言しました。

この「実現させる会」の発足当初は、代表になる方が誰もいなかったもので、私が(2008年4月から)代表となりました。ですが、やはり市職員が代表になるのは・・・、ということで、2008年から2013年までボランティアとして入っていた老健施設の職員が初代の会長になりました。その後、その方が転勤になったので、また私に会長職が戻ってきました。私が2013年4月から2017(平成29)年3月まで会長を務めました。その後、会の名称が色々変わってきたのですが、今の「十和田セーフコミュニティをみんなですすめ隊」となり、隊長は蛸沢さんという警備保障会社の方が務めています。

5. 「実現させる会」の役割と活動実績

5-1 「実現させる会」の役割

「実現させる会」の役割として、セーフコミュニティ推進のサポート隊として活動しようということになりました。まずは、セーフコミュニティの理念と認証取得の意義の普及啓発を始めました。この頃は、まだ市民はだれも、私たちさえもセーフコミュニティについて説明できない状況なので、セーフコミュニティと聞いても「は？ それ何？」という感じでした。ですので、「SC」とか「セフコミ」など省略しないで、とにかく舌を噛んでもいいから「セーフコミュニティ」と言ってくださいと言い続け、それを一貫して守ってきました。そして、行政に頼らないボランティア活動、具体的な施策の検討、市への提言ということで、独自に先ほどの先生方と私の4人で企画チームとなり、ワーキンググループとして、「子どもの外傷」、「自殺」、「転倒」、「サーベイランス」という形で行ってきています。行政に頼らないボランティア活動といいましても、行政に頼らなければならない部分も多々あります。その一方で、行政だけでは実現できないというところが、この

¹ 中野渡春雄氏(2005年1月～2008年1月)

セーフコミュニティの難しいところでもあります。ですけれども、十和田市の場合は、豊富な市民力と通訳をはじめとする多様な人材を活用できたのです。

5-2 「実現させる会」の活動実績

「実現させる会」は、当時市のセーフコミュニティの組織全てに委員として参画しています。これはとても大変なことでした。「役所の組織の中に外部の者がなぜ入って活動しているの」ということです。大変でしたが、保健所長などが何度も(セーフコミュニティについて)説明して、このような横断的組織というのはやはり市の組織だけでは実現しないということで何か月もかかりましたけれども説得したのです。そして次に国内外での学会発表に出席しました。2007年9月に京都府亀岡市で行われた第一回日本セーフティプロモーション学会での発表、その後亀岡市にきたカロリンスカの国際セーフコミュニティ認証センター(スウェーデン)のセンター長であるレイフ・スヴァンストローム教授を十和田市にも招聘しました。同じ年の11月に第17回国際セーフコミュニティ学会(タイ)で、本市の取り組みや高齢者の転倒予防の報告、そしてポスターでも子どもの事故予防、自殺、高齢者の転倒予防ということで発表しました。

前市長がセーフコミュニティを宣言したのが2008(平成19)年の1月、そして本格的に「やるよ」って言ったのが同年の4月です。皆さんもお分かりのように、4月というのは予算が決まった後です。ですから、「予算ゼロ」からスタートしているのが、十和田市の特徴です。「じゃあお金はどうしたの」って聞かれるのですが、市から補助金をちょつともらって、あとはボランティアの自分たちの資金・会費、ボランティアの寄附金で賄いました。県や各団体からの助成金を得るために、(申請書を)一生懸命書きました。このように、市の予算を得ないで活動を続けてきたんですね。ですけれども、私たち、一生懸命勉強会してきたのでリーダーシップを取れるようになって、同年5月から領域別の作業部会がスタートした際には、それぞれの部会のリーダーとして、どの部会でもプログラムの提言をしてました。

また、6月には、市の外傷世帯調査訪問に全面協力しています。これは青森県立保健大学が中心になって行いました。この世帯調査のシートは、韓国で実施された調査票を日本語に訳して、それを十和田バージョンに直しています。当初は訪問調査でなくて、郵送・留め置きで実施すると聞いていたのですが、保健所の先生が韓国のセーフコミュニティの視察に行って「新井山さん、あれは留め置きでなくて直接調査訪問をしなければダメなんだよ」ということになり、郵送調査の予算を訪問調査の予算に組み替えました。これはちょっと至難の業でした。これには保健師だけでなく、市の職員も県の職員も、そして民生委員、町内会、市民ボランティア120～130人に協力してもらって、約600世帯を訪問して行いました。この調査訪問も非常に手間がかかる調査でした。家庭ごとに一回調査訪問するのでなくて、その家庭の一人ひとりに調査訪問するのです。例えば、4人家族だと4人それぞれに調査して「あなたはこんな

経験がありますか、ありませんか？」といった質問をしました。まえもってプレテストをし、何回も研修会を重ねてから実施しています。

また、2008年にセーフコミュニティの歌をつくりました。この時は、今の新しいバージョンなのですが、セーフコミュニティらしい「怪しいにおいを感じたら～」という歌詞の歌で、セーフコミュニティの歌の原曲になっています。次にロゴマーク「今日も無事でいてほしい」も作成しました。私たちがこのバッチを作って市の部課長たちにも配布しました。2009年1月に自殺が非常に多いということで、傾聴サロン「ルピナス」を開設したり、次の年には認証に向けて国際認証審査員による現地審査、これはパイ・ル先生(台湾)とチョ・ジュンピル先生(韓国)が来られた際にも協力しました。

2009年8月に最初の認証を取得しました。この認証は、本当に「皆で」「(市民も市職員も)一緒に」認証を取得したという感じがありました。ボランティアだけでなく、やっぱり同じ釜の飯を食べた、勉強会を共にしてようやく認証取得に至ったと感じました。この1回目の認証取得に合わせて国際シンポジウムを実施しました。アジアにおけるセーフコミュニティ、そして第3回の日本セーフティプロモーション学会を行っています。これは、部門横断的な協働による自殺総合対策、そして、この参加者の受入れ(宿泊準備、運営、事務局等)を引き受けて、全てボランティアが行いました。そして、セーフコミュニティ認証を実現したので、2010年1月には「すすめる会」として普及啓発に力を入れようということで、「セーフコミュニティとわだをすすめる会」と名称を変えて活動を続けることになりました。

2010年には、韓国スウォン市での国際学会に参加しました。これも全部私たちボランティアのお金です。そして、6月に小中学校に標語を募集しました。この後、この2011年の2月に保健所長が青森県立保健大学に赴任することになりましたが、「セーフコミュニティの認証支援コーディネーターとして継続して支援したいのでよろしくお願いします」と市長に正式に要望をあげられました。そのような中、同年3月には東日本大震災があり、その後少し活動が停滞傾向になりました。保健所長が個人的に支援するには限界があるのではないかなということもありまして、2013年に再認証のための支援として、日本セーフコミュニティ支援機構の白石さんが十和田市に関わることになりました。この後の経緯については、白石さんがご存じの通りです。この間、震災後に弁護士と一緒にこころの健康相談、安全安心出前講座、建築士会と一緒に家庭内での転倒危険個所の改善や耐震診断などを行っております。

2回目の認証を迎え、会の活動も停滞気味になったので、「活動の見直しをしましょう」「やっぱりもっともっと広がっていかないといけない」ということで、2018年5月に「とわだセーフコミュニティをみんなですすめ隊」、「希望」の「～たい」と「チーム」としての「隊」に掛けて改称しました。会長は、1年前から現在の会長で、スローガンとして、「今日も無事でいてほしい」「市民ひとり、一(いち)セーフコミュニティ」を提唱して活動しています。県立十和田西高校に観光科が

あって、2018年にここに出前講座をし、高校生も巻き込みました。令和2年2月に3回目の国際認証となりました。この直後、コロナ下で対面活動が自粛されるようになりました。ここは非常に大変な時期でした。皆さん方もそうだと思うんですけど、私たちボランティアも活動ができない状態だったので、会員募集も見合わせることで、現在に至っております。先ほども申しましたけれども、1回目の認証取得の時は、まさに皆で一緒に取ったということで、ボランティアがリーダーシップを取ってきましたけれども、今はどちらかというと、行政がリーダーシップを取って4回目の認証を進めた感があります。

6. ボランティアと行政との協働

私なりに考えるボランティアと行政の協働といえ、いつもレイフ・スヴェンストローム教授の言葉が浮かびます。「一般的なボランティアと異なり、セーフコミュニティのボランティアというのは自分たちの関心があることだけ・興味があることだけに取り組むことではなくて、市の安全安心を目指す課題に取り組むサポーターとして活動することなんだよ。そのことをくれぐれも忘れないようにしてほしい」という言葉が教訓として学んだことです。市民と自治体職員とともに学ぶ姿勢が大切です。行政の視点から見ると、ボランティアからの提案は、お金がかかるようなことばかり言うし、やれないようなことも平気で言う場合もあるとおもいますが、この提案に対して真摯に向き合って、良いところは吸い上げ、また、ボランティアの意欲が失われないような継続できるように支援し合うのがいいのではないかと。住民には、非常に力のある人がいます。ですから、住民の力を信じる、そして人材をフルに活用する。「安全安心のまちづくり」は誰にとっても大事なことです。これは欠かせないものです。今の日本全体を見ても、犯罪もそうですし、震災もそうですし、ありとあらゆる安全安心のリスクが高まっています。ですので、やはり私たちが取り組み続けていかなければ意味がないのではないと思っております。

私は今まで、ボランティアとして、行政職員として、行政とボランティアとの橋渡しの役割を果たしてきたのかな、と自分では思います。でも実際に、役所の職員の方には、セーフコミュニティの取組みがとても苦痛な取り組みと聞いております。事務的な取り組みではない、人や組織と接します。時には苦手な組織や人に頭を下げて、お願いもしなければならぬ。そのようなことを苦手とする職員が多いです、どちらかというと。ですけど、このセーフコミュニティに関わったことを強みにすれば、どこの課に行っても通用すると思います。そしてそれが自分の強みになると私は思っております。ですから、セーフコミュニティの担当になった職員は、これを自分の、単なる仕事・仕事だからやるというのではなくて、セーフコミュニティを担当したことで人との関わり、ネットワークづくり、そういう風なものを大事にしながら、自分も磨ける職場だと思っただけであればいいなと思います。実際、特に、サーベイランスの統計を取るときに、ある職員が（当時、課長だった）私にこう言いました。「課長、自殺の首吊りとかそのような資料を取る仕

事、それ見るだけで吐き気がするんです。とても辛いんです」と。とても大変な仕事ですが、これは普通の一般の市民の方には分かっていただけないと思います。そのような(行政の大変な部分を)ことを市民に伝えるのもボランティアの役割なんですね。ですので、ボランティアの人を活かしながら、お互いに手を取り合いながらやっていければいいと思います。また、セーフコミュニティというのは、事務的なものではなく、発想の転換も必要なので、壁に突き当たることも多々あります。なので、これは一自治体だけの問題ではなく、同じセーフコミュニティを標榜し、目指している自治体とネットワークをつくりながら、いいところを吸収していく。常に学び合うということで、認証の指標の中で「国内外のネットワークづくり」とあるのはそのためなのです。ですので、そのことを皆さん方も十分に認識をしながら取り組んでいければいいのではないかな、と思います。やはり、このセーフコミュニティを自分たちの仕事としたからには、これをもとに苦手な自分を変えられるよ、という気持ちで取り組めばいいのではないかなと思います。

7. サーベイランスについて

市職員の時に、外傷サーベイランスがなければ認証はなかなか難しいよという指摘がありました。最初は、職員に負担がかかるので、本当は私はやりたくなかったのです。でも、やりたくないなあと思いながら一年ほど経過した時、保健所長などからサーベイランスがとても大事なんだよと再々言われました。当初は反対したんだけど、「仕方ない、やるか」ということで市立中央病院と連携を組もうと思ったんだけど、医師が事務的な作業が面倒なので応じてくれなかったのです。それで、(市の医師会の会長が外科の先生だったので)外科の先生方と医師会と相談して、市内の外科と整形外科の先生を巻き込みました。それと消防、救急隊の人たちを巻き込んで、記録を取るためのシートを作りました。「このようなシートでどうですか」と医師会長と相談して、「これならやってもいいよ」ということになりました。その代わり、市が毎月必ず回収に来てください、ということでした。パソコンがまだ不自由な時代だったので、毎月回収に行きました。そうしているうちに、市内の開業医が多忙ななか協力しているのに、市の総合病院が協力しないのはおかしいという声が出てきて、市の総合病院はようやく重い腰をあげて「やりましょう」ということになりました。

当初、市立中央病院では子どもの外傷だけをサーベイランスで支援しようということで、産総研(産業総合研究所)を巻き込んですぐ統計的分析ができるところまでいったんですけど、院長以外の医師が「とても忙しくてできない」と反対して実現できませんでした。でも、医師会の先生と一緒に、子どもの外傷だけでなく全体的な統計を取りましょうということで、取り始めることができ、今に至っています。そのような中で、市内の先生方も高齢化していくし、職員も毎月毎月取りに行くのも大変なのでということで、市の病院だけにしましょうということで、今

は市立病院と救急データに絞って分析しています。厚木市のように専門的に分析してくれる先生がいればよいのですが、データ収集も職員が分析しないといけないので大変です。先日も、十和田市の市議員が「キッチンとデータを分析するには専門の先生が必要だね」という話をされました。その通りです。セーフコミュニティを担当されている市担当職員の大変さを少しわかってもらえた気がします。

8. 最後に

十和田市が初めて認証審査を受けた時は、前市長（中野渡春雄氏）の名前で認証申請書を提出しました。その後、審査が始まってから小山田市長になりましたので、就任されてすぐに私と当時の保健所長でセーフコミュニティについて行政説明を行いました。小山田市長は、私たちの説明を聞いて速やかに理解してくださったので、引き続き審査を進めることができました。このように、小山田市長は当初からセーフコミュニティについて理解がある市長でした。²



² セーフコミュニティ導入後の歴代十和田市長
2007年1月～2008年1月 中野渡 春雄氏
2008年1月～2025年1月 小山田 久氏
2025年1月～ 櫻田 百合子氏



8. 参加者との質疑応答

※ 以下の質疑応答については、新井山さんのお人柄とSCへの想いが伝わるよう、ご本人のご発言にはできるだけ手を加えないまま記録しています。

さいたま市

十和田市で「一(いち)市民、一(いち)セーフコミュニティ」がなぜできたのか、という点ですが、その前段階で、すでに「一(いち)市民、一(いち)ボランティア」という考えが根付いていたのでセーフコミュニティの推進もしやすかったのでしょうか。

新井山氏

そう思います。「一(いち)市民、一(いち)スポーツ、一(いち)ボランティア」と(小山田市長の)前の市長が10年くらい提唱していて、色んなボランティア組織ができていたので、ボランティア活動がすごく盛んでした。

さいたま市

(発言者は、)自殺対策委員会を担当して、市民ボランティアの方が相談員をやってくださったりするんですけど、市民の方々が「(自殺予防の)対応します」というのはなかなか難しいなと思う部分もあるのですが、いかがですか。

新井山氏

十和田市の(傾聴ボランティア団体)ルピナスは、保健師、看護師、一般市民、そして自殺予防の紙芝居を作って出前講座で普及している「心の会」の方々が入っています。やっぱりボランティアなのでそこだけでは完結はできなくて、専門機関に橋渡ししかできないです。なので、あくまでも相談の窓口の1つとして活動をしています。月2回、今もずっと活動しています。どこのボランティアもそうなんだけど、(活動を)始めた時は60代であっても活動を続けるなかで年齢を重ねる。一方で、新しい、若いボランティアはなかなか入りにくい。なぜかっていうと、「とてもめんどくさい」って言うんです。中身が。統計的なものを出されると頭が痛くなるって。「なんでこんなめんどくさくするの」ってこの前も言われました。市職員が説明すると、説明の時にどうしても数が出るでしょ、「そういうのはいらない」って。「何にもめんどくさくないんだよ、普段やってることがそうだよ」というんだけど。

それから、私たち、今は定例会を夜に開催していますが、夜にすると若い人は出てきやすいけれど、シニアの人は(車を)運転できないから参加できなくて抜けていっています。特に、コロナ禍を機に、今は若い人も募集していません。セーフコミュニティの大事さは市民に浸透しているけれど、ボランティアを新たに開拓するのは、今はなかなか難しいと感じています。(既に活動に加わっている)ボランティアの年齢はだんだん高くなっていくから活動がしぼんてくる。対策としては、既存の具体的な活動の中で取組むとか、自分たちだけでなく、いろんな組織と一緒にやってやるしかないかもしれないと思っています。

亀岡市

本市は七つの対策委員会がありますが、「結局、事務局としてどう考えていますか」と(市民の委員から)よく聞かれ、最終的には行政がまとめています。(対策委員会の委員には)せっかくボランティアで集まっていたので、そこは考えていただきたいと思っています。一緒にイベントをするにしても、こちらから呼びかけるのではなくて、委員のメンバーからアクションを起こしていただきたいと考えているのですが、なかなかそうなっていない。初めは勢いがあっても、落ち着いてきた、成熟してきた段階でのアドバイスを頂きたいです。

新井山氏

私たちの会は、市にもいろんな提言をする一方で、積極的に活動を続けています。今も、コロナの時も、めげずに企画チームで毎月定例会をやっていて、高校生の出前講座も続けてやっています。会として、行政に対する「言い分」も「提言」もいっぱいありますが、行政の方にしたら、「これって当初予算にないんだよ」とか、「今から予算取りして動くことはできないよ」、

「来年度ならできるかもしれない」といった言い分もあります。でも、そうしているうちに職員が（異動で）変わるから、また、もう一回同じ提言や意見を伝えて、「去年も同じこと言ったんだけどな」ってなるでしょう？ その辺のやり取りがすごく難しいです。ボランティアも、10年前だったら役所に奉仕する、市民のためだったら自分の時間を割いてでもやるっていう市民の人が多かったけれど、今は違ってきています。「なんで役所・職員のために自分達がやんなきゃならないの？」「それはあなたたちの仕事ではないの？」って思うボランティアも出てきています。なので、例えば、いろんな講座で、ボランティアの方に「ボランティアの話お願いします」ってお願いすると、前は「ハイ、いいですよ」だったのが、だんだん「なぜ旅費も出ないの？」となるわけです。その辺の兼ね合いが難しい。ボランティアが最も意欲を失ったりショックなのが、自分たちが提案したことが受け入れられなかったり、できないって言われることです。なので、「まずはこちらでもちょっと検討したりすると、やれる部分があるかもしれないし、予算も取れるかもしれないけれど」・・・と言える部分があるかもしれないですし。行政として出来かねるということもあって、「できない」ものを「できる」とは言えないけれど、言い方が大切で、とにかく「意欲をなくさせない」のが大事だと思います。私たちも色んな提案をして、なかには市長に直訴したものもあります。私たちは圧力団体ではありません。純粋に十和田市を良くしたいから毎月集まって色々話をしてるのに耳を傾けてくれないと、やはり「なんでわからないの？」ってなるでしょう？なので、ボランティアとつかず離れず、その会議だけの会話じゃなくて、いろんなところで時に触れて市民の方と話すっていうのが大事だと思います。どうしても、やはり形式ばった会議の中では発言できない市民の人は多いのです。言いたくても、ここ（喉の奥）まで出て来てるけれども、「この場でいえば角が立つかな」とか市民の人たちは意外と考えているものです。それから市民の人たちは、行政職員が「この人はセーフコミュニティに熱心な人」だとか、「この人はやる気ない人」だとか分かるって言いますよ。だから、市民の前では、とにかく「やる」「やるっていう気持ち」でないと、市民の人たちはついていかないと思います。

松原市

認証について、皆で「獲得」した感じがしたという初回の認証と、二回目以降の認証の違い、市民の方の気持ちの違いはどういったところにあるのでしょうか。

新井山氏

違いは大いにあると思います。十和田市の場合、私が職員の時からずっと関わってきていて、市の職員ともボランティアともお互いに橋渡ししてきているから成り立っていたのかもしれませんが。初回のメンバー、ともに勉強会を重ねてきた人たちは、今はほとんど転勤したり、異動し

たりして残っていない。初回から知っているのは私だけです。今回、このセーフコミュニティ定例会で話すにあたって、私も過去を色々振り返ってみると、やはり一回目はみんな必死でした。二回目、三回目になると、ある程度認証を取るのが「当たり前」になってきているから、どちらかというと「整える」という感じになってきて、市民の方まで目が向かない気がします。

あれもこれもというのではなくて、一つなり二つなりの「これが課題」というものに全体で取り組むってというのが一番いい姿勢でないかな、と私は思っています。十和田は当初から8つの部会を設置しましたが、多すぎるのではないかと感じます。もっと縮小して、4部会くらいにして、(既存の部会そのものは継続したとしても)結集した形でやれば、もっともって成果があるのではないかなと思っています。

やっぱり変わってきますよ、どうやっても。初回の気持ちとは全然違います。だから、定期的に勉強会もしないといけないのです。初回に戻って、セーフコミュニティとはどういうことなのかっていうのを、知らせていかないといけないと思います。十和田の場合も、部会の人たちもセーフコミュニティって名前は知っているけど、じゃあ何なのか、っていうのは知らない人も多いと思います。なので、「研修会も重ねていこうね」とはよく言っています。そういう意味では、私たちの会も、いくらでも力を貸すよって、言っています。変わってくるのは当たり前だと思います。特に、市の職員は二、三年で変わるわけですから。そうすると、また、新たに勉強し直して、なかなか積み重ねていくのが難しいでしょ。やっぱり認証のために動かざるを得ないと思います。その辺の引継ぎ方、継続の仕方がすごく難しいとは思っています。なので、私も初期のことをずっと伝えたりしています。今もセーフコミュニティに取り組むためにはどうすればいいのかっていうことは常々考えて、皆とも話し合いをしてるんだけど、やはり「話し合い」ってものすごく大事なんです。

白石 (JISC)

新井山さんから「すすめ隊」の隊長を引き継がれた蛭沢さんは、「新井山さんのためなら、セーフコミュニティのためなら何でもする」っておっしゃっていますね。新井山さんの後姿を見てこられたのだと思いますが、どのような経緯があったのですか。

新井山氏

今の隊長は、私が部長の時に商工会議所の青年部の役をやった人だけど、警備保障会社の人だから、台湾のセーフコミュニティの警備保障の話をしたらとても感動してくれたんです。機会があるごとに「セーフコミュニティにぜひ入ってください」「次会長になってね」って言う

ていました。台湾のセーフコミュニティの話を聞いたのが良かったんだと思います。私も、台湾に行かなければ、全然分からなかったと思います。

白石 (JISC)

市民が「主」となっているという意味で、台湾のセーフコミュニティが日本のこれからに学びがあると感じられますか。市民の方が強い主導権を持っていて、それを行政が制度的にバックアップする感じですね。

新井山氏

そうですね。台湾はすごい。台湾に行ったときは、実際、「警察」という言葉はでてきたけど、「役所」という言葉は出てきませんでした。役所はずっとこちの端っこにいて、地域の警察がリーダーになっていた。日本警察政策学会が研究事業で行ったことの意味がその時分かりました。厚木市などは治安維持のためとか(セーフコミュニティを導入する)目的があったと思います。十和田市がセーフコミュニティをやるにあたってすごくためになったのが、当時、行政でセーフコミュニティの担当だった亀岡市と厚木市の課長(その後、引き続き部長として SC を担当)でした。あの方たちがいなければ、十和田もセーフコミュニティはできなかったと思います。そして、日本セーフティプロモーション学会や日本市民安全学会の人たちの力がなければ、十和田のセーフコミュニティはなかったとおもいます。なので、やっぱり色んな幅広いネットワークづくりというのが、このセーフコミュニティにはとても大事なことです。今は予算かけに行かなくても、いろんな記録や録画・録音資料などを入手できます。特に、日本市民安全学会は、市民向けに実践できる事例について学ぶことができます。

やっぱり「人」が大切です。市民の中にもキーマンになる人がいます。その人をいち早く見つけ出すのが大事です。必ずいますので。

郡山市

私たちの市ではボランティアがあまり機能していないように思います。最初の認証後、コロナ禍で対策委員会がなかなか開催できず、行政主導になってしまいました。そこで活動が分断されてしまって、現在は難しいながらも、取組みを立て直そうとしています。でも、ボランティアや委員の方も「あて職」の方が多く、黙っていることが多く、悩んでいます。

新井山氏

すごくわかります。「私たちは去る者は追わず、来るものは拒まず」の気持ちでいます。今の熱心に関わっておられる部長を退職しても離さないで関わりつづけてもらうことが大切です。例えば、(現在もサーベイランス委員会のメンバーになっておられる) 亀岡市の当時の課長のよう
に、どの部会でもいいので役割を担ってもらって、「逃がさない」のが大事ですよ！私の場合
は、(市民ではないので) 好き好んで十和田に通ってるけど、そのボランティア組織を見守る人
がいた方がいいと思います。その人が、今度は行政との橋渡しの役割をしてくれます。そのよう
な人を見つけること、やっぱりせつかくセーフコミュニティを始めているからこれを絶やさないた
めには、この手段が一番だと思います。セーフコミュニティからそのような方たちが関わり続けら
れるようにしてもらえたらいいとおもいます。「初心忘るるべからず」で、初心をずっともち続けて
いくのがとても大事です。十和田も最初の認証の時はほんとにどうなることかと思ったもので
す。ちょうど新型インフルエンザも流行ったところで大変でした。その後も、認証式典をやる段に
なっても、どのように実施するかとか、通訳も同時通訳なのかとか。亀岡市の場合は同時通訳
だったけれど、十和田ではそれは(設備の関係で) できない。だから(設備がある) 青森県立保
健大学まで皆をバスで連れて行かないとならないのかって心配しました。結局、逐語通訳でよ
くて、まず十和田の市内の会場でできてよかったんですけど。ゼロ予算から始まっていたから、
府の全面的な支援があった亀岡の事例は参考にならなくて悩みに悩みました。

久留米市

これから私たちも市民の方々の関わりを検討していきたいと思っています。「すすめ隊」やボ
ランティアの皆さんは、十和田市の推進体制にはどのように関わっていますか。ボランティアの
メンバーで部会にはいつてらっしゃるのか、まったく外からアドバイザー的に市の担当課の方と
お話しされているのでしょうか。

新井山氏

十和田市の場合、今は市のトップからなる「十和田市セーフコミュニティ懇談会」に「すすめ
隊」の隊長である蛭沢さんが入っています。そして、各領域部会にメンバーが入って、その部
会長や部会員として提言をしています。そして、私が外傷サーベイランスの委員になって、会
議で話し合ったことを領域部会に浸透させるという役割を担っています。各部会の運営や日程
調整は行政の人たちがやってくれているのでやらないのですが、いろんなイベントがあったと
きに日程調整の打診をいただいています。

久留米市

十和田でイベントや(認証)審査の際の運営の手伝いはされていますか。

新井山氏

現地審査などの運営の手伝いはしないけれど、各部会の発表はします。

久留米市

ボランティアの方は、全員が対策部会に入っているのですか。

新井山氏

全員ではなくて、入っていない人もいます。部会の日程が夜だったり昼だったりで、参加できない人もいます。あくまでも対策部会の会議等に参加できる人がメンバーとして入っています。ただ、対策部会のメンバーでなくても、イベントにはいろいろ参加しています。

久留米市

それとは別に「すすめ隊」の集まりもされているんですか。

新井山氏

「すすめ隊」の定例会は、月 1 回開催しています。

郡山市

あて職の方に委員をお願いすると、皆さん(役職にいる間だけの出席なので)、なかなか続かないんです。本気度が若干弱いという印象があります。できれば、「意欲がある方」や「若い方」に来てもらいたいと思っています。十和田市ではどうでしょうか？

新井山氏

「すすめ隊」でみると、人数そのものも少ないけれども 30-40 代の若い世代の方もいます。高校生で来たいという人もいますが、定例会が夜だから、親が心配するから難しい部分もあります。

都留市

「すすめ隊」の会議の内容はどのようなことでしょうか。

新井山氏

各領域部会での話し合ったことの報告ですね。それから、今後何か新しい事業がないかという提案をしたりします。例えば、自殺予防ステッカーをつくったんだけど、これをどこに貼るかという話し合いをしたり、北里大学の生徒たちのメンタルヘルスの問題について大学と協議する場を設けたりするための話し合いをしています。

都留市

各部会の話し合いを持ち帰って、別の組織が対策を考えてというのが素晴らしいと思いました。都留市もデータの分析とかをサーベイランス委員会や事前指導に向けてやっているんですが、そこがなかなかノウハウというか、データの扱い方・見方が難しいなと、苦しんでいる所なので参考になりました。

秩父市

立ち上げ当初から新井山さんがセーフコミュニティに関わって、リーダーシップを取ってやられているということなのですが、新井山さんの次に続く体制構築、人材の育成は何かされていますか？

新井山氏

リーダーシップと言っても、正面のリーダーシップではなくて、今は「顧問」という形です。今の蛭沢隊長が後継者です。40-50代くらいです。若手のホープとしてこの方が今後続けていきます。

白石（JISC）

蛭沢さんが、「自分はセーフコミュニティを“祭り”にしたい」とおっしゃったことがあって、それって素敵だなとおもいました。「お祭りは、地域の大人が子どもに技術を伝承して成り立っていて、各世代の交流を通して地域愛を育む大切な行事です。セーフコミュニティも様々な世代が地域のことを一緒に考え、取組むという意味では祭りと同じです。だからこそ、セーフコミュニティは人口減少時代に若者が生まれ育った地域に残ってくれるために必要なことだと思います

す。」とおっしゃっていました。そういった視点から取組みを工夫するのも1つの方法だと思います。

鹿児島市

ボランティアの方が「自分に興味がないことにも参加する」ということで、(地元では)あまりそういう方がおられたことがないのですごいと思いました。そうなるためのモチベーションを上げる工夫は何かありますか？

新井山氏

難しいけれど、セーフコミュニティは「人の生き方」にも関係してくると思うのです。それから、やはり基本になっているのは、どの人の話を聞いても「市のために」って言ってるんですよ。十和田市をより安全安心なまちにするために、自分たちの意見を言うし、聞いてほしいというのはずっと言っています。当初のモチベーションが維持されているというのがあるんじゃないかと思います。今いる人たちのなかには、当初から一緒に勉強会に関わった人、途中から参加した人もいますが、何かしら危機感をもって入ってきてる人がいる気がします。例えば、防災士の資格を持っている人もいますが、やはり東日本大震災を契機にして、命を守っていきたいということに目覚めたとか。そのような人たちが参加している気がします。私たちが新たにどうのこうのと言う前に、それがセーフコミュニティの考え方と一致したという状況ではないかと思います。

白石 (JISC)

いろんな課題があっても、「まちを良くしたい」という共通した思いで繋がっていて、そのための方法としてセーフコミュニティで実現していこうというような、「一つになるもの」がすすめ隊のなかにあるという感じでしょうか？

新井山氏

そういうことでしょうね。みんなそういう気持ちは同じですから。「すすめ隊」のみんなは、同じ考えのもとに来ているのです。個々にやるのではなく、皆なで結集させてやっていこう、そういう思いが一番強いのではないかと思いますね。

厚木市

対策委員会を続けるのが難しいです。事務局だけでなく委員のモチベーションが低いのですが、何か一緒にやっていくためのモチベーションの秘策はありますか？

新井山氏

「秘策」はないです。私が外から見えて一番感じているのが、セーフコミュニティに対する理解が、職員と(対策委員会や)部会の人とちょっと離れていることです。乖離している感じがするので、同じような研修を、職員も対策委員の人も一緒に受けるのが大事だと思います。セーフコミュニティの基本的なことをもう一度おさらいすべき時期に来たのではないかと思います。先ほどスヴァンストローム教授の話を出したのは、そのためです。ボランティアの方は自分の好きなことだけやってるのじゃないんだよ、地域の課題に沿ったサポーターだよっていうことを常々忘れないように、ということでご紹介させていただきました。ただ、それは堅苦しいやり方でなくて、「面白いやり方」でわくわくするようなものでなければダメだとも思います。話し合いでも、活動でも、なんでも、楽しくできれば一番いいんです。その辺がとても大事なことで、単なる情報交換でもいいので、楽しく、続けるっていうのがすごく大事だと思います。

今とても難しい時期だと思いますが、やはりセーフコミュニティを通して目指すところはお互いに同じなのですから、仲間だって思うことが大事です。みんな仲間なんだから。セーフコミュニティを目指すっていうところで、目指し方をみんなで考えていかなきゃって思うのです。そのためには、話し合いを何回も何回も何回も何回もすることが大切だと思います。

十和田市

セーフコミュニティの取組みでわからないことは新井山さんに聞きながら、どう改善できるか考えながら進めています。現在、十和田市では、セーフコミュニティ「係」が担当していることから、物ごとを進める際に「部長」や「課長」にあげるまでに時間を要します。新井山さんが部長や課長をされていた時でしたら他の部課との連携も可能だったこともあると思いますが、今は「係」が担当しているので、連携においては、行政組織の「係」より上の方に関わっていただくことで、他の部や課との連携がよりスムーズに取れるのではないかと考えています。

他の部や課の業務にプラスになるようにセーフコミュニティを活用してもらえるとよいのですが、なかなか円滑に進んでいないのは事実です。「係」の段階でできることは限界があるので、上席の方々が積極的に関わることで変わるのではないか、と思います。内部から変わっていけば、と思っています。

9. 資料

R6年12月19日

セーフコミュニティとボランティアの
協働



セーフコミュニティとわだをみんなですすめ隊
顧問 新井山 洋子

本日の内容

1. 自己紹介
2. 市職員としてのセーフコミュニティの関わり
3. 十和田のモデルは台湾セーフコミュニティ
4. セーフコミュニティとわだを実現させる会
5. 「実現させる会」の役割と実績
6. ボランティアと行政との協働

1. 自己紹介

- ・1949年 青森県三沢市
- ・1973年 (S48) 青森県十和田市保健師採用
- ・2005年 (H17.4) 市健康推進課長
- ・2008年 (H19.4) 市健康福祉部長
- ・2010年 (H22.4) 市セーフコミュニティ推進室次長
- ・2012年 (H24.4～H25.3)
市セーフコミュニティコーディネーター

2. 市職員としてのセーフコミュニティの関わり
2004. 3～2012. 3

1. 2004年 (H16) 7月 セーフティプロモーション講演会
2. 2005年 (H17) 8月 市長に説明 行政施策の意義
* 市長～行政で取り上げる意義・成果等勉強会の提案
3. 2005年10月～ 自主勉強会開始 (保健セクター主導)
月1～2回 (市・県保健師・事務職)
講師 大西: 県上十三保健所長
反町: 青森保健所長
山田: 青森県立保健大学

3. 十和田のモデルは
台湾セーフコミュニティ

- ・2006年 (H18) 台湾セーフコミュニティ視察研修
* 日本警察政策学会研究事業の一貫
一番の学び「人力無限」
- ・ボランティア層の厚さ (10代～80代)
- ・共に学び合う姿勢
- ・警察主導ではあるが、消防・病院・警備会社・商業施設・行政など部門横断的な協働の取り組み

4. セーフコミュニティとわだを実現させる会
発足の経緯

- ・背景 2006 (H18)・2007 (H19) 年度
青森県子どもの外傷予防総合推進事業
(市内4地域・一学校・教育委員会・警察・町内会・病院・地域内介護施設・スーパー・自転車業界など)
- ・2007年 (H19) 1月
市民フォーラム～青森県主催・十和田市共催
* 同日終了後 セーフコミュニティ実現宣言

5. 「実現させる会」の役割と活動実績

役割

- ・セーフコミュニティ推進のサポート隊
- ・セーフコミュニティの理念と認証取得の意義の普及啓発
- ・行政に頼らないボランティア活動
- ・具体的施策の検討・市への提言

企画チーム・WG(子どもの外傷・自殺・転倒・サーベイランス)

活動実績 その1

1. 市のセーフコミュニティ組織全てに委員として参画
2. 国内外での学会発表
 - ☆2007(H19)年9月
 - ・第1回日本セーフティプロモーション学会
 - ・スウェーデン・レイフ・スパンストローム教授の市招聘
 - ☆2007(H19)年11月
 - ・第17回国際学会(タイ)発表:

活動実績 その2

- ・2008年(H20)4月 *市本格的始動
- ・市からの補助金決定
 - これまでに資金:会費、ボランティア等寄付、各種団体助成金など
- ・5月以降 領域別作業部会スタート(各作業部会リーダーとしてプログラムの提言
- ・6月 市の外傷世帯調査訪問に全面協力
- ・7月 アジアセーフコミュニティ提携支援センター朴先生来十視察等全面協力

活動実績 その3

- ☆2008(H20)年以降
 - ・セーフコミュニティの歌(初回) 作詞作曲
 - ・ロゴマーク「今日も無事でいてほしい」作成
- ☆2009年(H21)1月 傾聴・相談サロン「ルピナス」開設
- ☆2009年(H21)3月 国際認証専門員による現地審査に全面協力
- ☆2009年8月:1回目国際認証取得
 - ・国際シンポジウム
 - ・第3回日本セーフティプロモーション学会学術大会in十和田
 - 参加者受け入れ・宿泊・準備・運営・全面協力
- ☆2010年1月 「セーフコミュニティとわだをすすめる会」となる

活動実績 その4

- 2010(H22) 3月 韓国スウォン国際学会参加
- 〃 6月 小中学校標語募集
- * 2011・3月 東日本大震災 被災者支援
- 2011(H23) 7月 多重債務・こころの相談会開始
 - (青森県弁護士りんごの会と協働)
- 2012(H24) 7月 安全安心出前講座開始
- 2013(H25) 4月再認証支援(日本セーフコミュニティ支援機構)
 - ワークショップ・セーフコミュニティサポーター育成
- 2015(H27) 「今日も無事でいてほしい」CD作成

活動実績 その5

- ・2016(H28)2017(H29):会の活動見直し
- ・2018(H29)5月 「とわだセーフコミュニティをみんなですすめ隊」に改称
 - スローガン 「今日も無事でいてほしい」
 - ～市民ひとり1セーフコミュニティ～
- 2018.8 県立十和田西高校出前講座 高校生の巻き込み
- 2020(R2) 2月 3回目国際認証*この後 コロナ禍にて対面自粛するが高校支援・毎月の定例会継続
- 2022(R5) 自殺予防ステッカー作成 ・企業・北里大学など普及
- 2024(R6)11月 4回目国際認証

6. ボランティアと行政との協働

・セーフコミュニティのボランティアとは

通常のボランティアと異なり、自分達の関心のあることだけを行うのではない。市の安全安心を目指す課題に取り組むサポーターとして活動すべきである—レイフ・スバンストローム教授談

- ・自治体職員とともに学び合う姿勢
- ・ボランティアの提案に真摯に向き合い、良いところは吸い上げる。また、継続できるように支援しあう。
- ・住民の力と人材をフル活用
- ・安全安心なまちづくりは誰にとっても大切
- ・継続しなければ意味がない

2025 年 1 月 6 日 執筆・編集 白石・前田

2025 年 1 月 21 日 校正 白石

2025 年 1 月 28 日 校正 白石

2025 年 3 月 17 日 最終校正 白石